

## 「こころのケア」シンポジウムを開催 ―子どもとトラウマ―

去る平成 20 年 11 月 20 日（木）、兵庫県こころのケアセンターにおいて、「こころのケア」シンポジウムを開催しました。

研究報告とパネルディスカッションの 2 部構成で行い、当日は、幅広い年代、様々な職種の方、約 260 名が参加し、多様な観点から「こころのケア」の現状と課題について認識を深める場となりました。

### 【研究報告】

兵庫県こころのケアセンターでは、精神科医や臨床心理士が「こころのケア」に関する実践的研究に取り組んでいます。パネルディスカッションに先立ち、4 人の主任研究員がそれぞれの研究内容について報告を行いました。

#### 「大規模災害直後における適切な心理的支援とは」

明石加代 主任研究員

現在作成中の「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き（PFA）」日本語版について報告。災害直後の混乱期には、治療ではなく回復力に焦点をあてた支援が適切であるという国際的なコンセンサスが形成されつつある。PFA はそのような潮流のなか、アメリカで開発された災害直後における適切な心理的支援法のマニュアルである。PFA 開発の歴史的経緯と日本への導入の意義について報告するとともに、PFA の指針および概要について紹介した。

#### 「遺族の心理的影響 - 悲嘆と生活の質に注目して」

宮井宏之 主任研究員

本研究は、外傷的な死別を体験した遺族の支援のあり方について、当センター診療所を受診した遺族 15 名に行った面接調査を踏まえ考察。結果、PTSD 症状や複雑性悲嘆、うつ症状が多く、遺族に認められ、心身への影響の大きさが示された。したがって、心理的影響や生活の質を適切に評価し、必要に応じて医学的介入がなされることが重要であるとの研究成果を報告した。

#### 「高齢者虐待の予防及び高齢者の支援体制について」

牧田 潔 主任研究員

本研究は高齢者虐待の予防対策として重要とされる「早期発見」の鍵となる虐待判断に関する調査と在宅高齢者支援の基幹施設における職員の燃え尽きの実態把握を目的としてメンタルヘルス調査を実施。結果については虐待判断では明らかな虐待行為以外は判断基準が一定でないこと。また、職員のメンタルヘルスについては良好でないという研究結果を報告した。

#### 「大規模交通災害被害者の健康被害について」

内海千種 主任研究員

大規模交通災害の負傷者を対象に、心身の健康に関する追跡調査を実施。今回は、面接調査 2 年目（事故後 2 年半）の結果の概要を報告。PTSD 症状やうつ症状といった精神医学的影響だけでなく、身体の痛みを含む生活の質（QOL）の低下もみられたことから、生活全体への影響も視野にいれた取り組みが重要であることを示唆した。

## 【パネルディスカッション】

「子どもとトラウマ」をテーマに、災害や事件、虐待、DV など子どもを取り巻く様々な問題と、子どもの抱えるトラウマについて、議論を行いました。

### ・パネリスト

富永 良喜 (兵庫教育大学大学院教授)  
森 茂起 (甲南大学人間科学研究所長)  
高田 昌代 (神戸市看護大学教授)

### ・コーディネーター

加藤 寛 (兵庫県こころのケアセンター副センター長)

## 富永 良喜 (兵庫教育大学大学院教授)

トラウマや PTSD は外からは非常に見えにくいので、学校に登校できないこと、大げがをすることなど、子どもの大きな反応や変化が外に現れるまで分からないことが多い。それ故、教師や保護者など周囲の大人は、子どもの行動の変化が起こる以前に、自分を責めている子どもの心をなだめるというようなかかわりが必要である。少しずつ日常生活の中で心を回復させながら、「悼むときは悼む、悲しむときは悲しむ、楽しいときは楽しんでいいんだよ」というメッセージが子どもたちには重要である。

また、インドネシアや中国四川の災害後の支援活動の経験からも、災害や事故が起きてからの対策としての心のケアだけでなく、予防として、学校教育の中に心の健康教育をきちんと位置づけることが必要である。

## 森 茂起 (甲南大学人間科学研究所長)

福祉分野で実践されているライフストーリーワークは、強烈な被害体験、外傷体験を自分の言葉で語っていくことで、自分の人生の物語の中に自分の体験を位置付けていく作業である外傷体験暴露である。外傷的な体験を持っている子どもの場合、どこかでその体験を語る経験を持たないと、その体験から一步踏み出せないのではないか。

もし、外傷的な体験を語らないでいる、あるいは語るができないことを放置しておく、語らないことによる人格全体の変化が起き、自分の感情をうまく表現できず、他の事柄も語るができなくなる。養護施設の子どもの言葉の遅れがよく指摘されるが、自分の体験を言葉で語るといことが難しいことによって、言葉の発達が困難な側面もあるのではないか。虐待などの外傷的な体験を持つ子どもに安全感を確保した環境で、過去の体験を語る機会を提供していくことが、子どもの回復にとって重要である。

## 高田 昌代 (神戸市看護大学教授)

DV の環境下で育つ子どもは、社会が考えるほど少なくなく、問題が複雑化するのには、虐待の加害者が、かつての DV の被害者である場合が多いからである。また、子どもは胎児の時代からも DV の影響を受けている場合がある。DV の環境下で育つことで直接暴力を受けたり、安全や成長発達が保障されないということになり、子ども自身がトラウマを抱えてしまうことになる。そのため、虐待と同様の影響がある。DV が存在することで、子どもが虐待を受け、子どもがトラウマを抱えるという構造になっているので、できるだけ早い段階で DV を発見する必要がある。そのため、予防的な対策の一つとして、中学生や高校生のデート DV に介入したり、教育するということが現在行われはじめている。教育現場や保健医療機関での DV 早期発見・早期介入と母子それぞれの側面でのケアが重要である。

## 加藤 寛 (兵庫県こころのケアセンター副センター長)

現在の社会状況においては、子どもを取り巻く問題を扱うと、悲観的な考えに陥りがちである。現実の私たちの社会に、虐待を受けている子どもたちが多数存在すること、成人しても強くその影響を残す子どもたちの存在を考えると、暗たんたる気持ちになる。しかし、もう一方で、私たちがきちんと注目しなければいけないことは、子どもには素晴らしい回復力があるという点である。多くの子どもたちは回復する。例えば、災害にあった子どもたちの9割以上はきちんと回復していく。また、虐待を受けた子どもたちの多くは、たくましく成長し、自分たちが親世代になったときには、むしろ子どもたちをととても大切にすることが多い。子どもたちが抱えるトラウマについては、これからも社会全体で目を向けなければならないが、同時に、子どもの回復力や子どもの健全な部分にもきちんと目を向け、そこを強化する対策や教育も考えなければならない。

